

中経 論壇

経営支援NPOクラブ^{参与}

吉田 仁



先日、東京丸の内で「世の中を良くする不快のデザイン展」を見た。この場所では通常、グッドデザイン賞受賞製品が展示されているが、今回は企画展として、「不快」に新しい価値を見出す製品が展示されていた。あえてひと手間加えることで商品価値を高めたとホットケーキミックス、日常生活での依存度を下げるため機能を絞った携帯端末、子供の誤飲防止のため非常に苦く作ったゲームカードなどである。一般的にデザインとは、人を心地よくするものであり、効率性や利便性を追求した製品であるが、「不快」を完全に排除することが良い社会なのか、という疑問がこの展示会を企画した意図であるという。ここでいう「不快」とは、感覚的・心理的な内容だけでなく、もっと広い概念で使われている。

私たちは、快適なものとして、利便性やスピードを追求し、それが豊かさと思ってしまうが、その一方で大きなものを失った。モータリゼーションによるスピード化により、人の行動範囲は広がり、リゾート開発によって生活の満足度は高まったが、それは環境

不快を排除することが良い社会か

破壊を招き、地球温暖化に直面することになった。私たちの身の回りをみても、さまざまな機能が集約されたスマートフォン、個人の利便性が、個人に依存症などの悪影響をもたらしている。便利さとスピードを手に入れる代わりに、大切なものを失ってきたのである。そうした反省が、モノを考える時間を確保するための単機能の携帯端末という発想になっている。

人の健康が、交感神経と副交感神経の動きのバランスによって維持されているように、日常生活においても、「快適」と「不快」のバランスが重要と、この展示会は訴えているのだと感じた。快適を華美、不快を質素に置き換えると、日本人は、こうしたバランス感覚を文化として持っているように思う。桜の散った後の風情や立待の月を愛する精神を有し、自然とともに生きる術を持っていた。方丈の庵室の中に宇宙を感じ、日野山に閑居する喜びを知っていた。おごりを退けて財を持たないことを素晴らしいと言っている。

「不快のデザイン展」で昔の夏には、鎌倉時代まではかぼらないとしても、せめて江戸期の粋人にならうって、田舎で過ごしてみようかと思う。夕暮れには、打ち水をし、庭の片隅に縁台床几を出し、ゆかたの胸元に団扇の風を入れながら、ひぐらしの声に耳傾ける。クーラーの快適さを捨て、日常の雑事から解放されて、スローライフを楽しむ、心身のリフレッシュをはかるのである。

日本人が持つバランス感覚

のである。